

看護婦学校の専任教員になって

中渚美紀恵

大阪市立桃山看護専門学校(大阪市)

先月号の佐々木信子さんは、助産婦学校の恩師で、病棟婦長をされ大変お世話になってます。婦長さんより、「りれー随筆」の依頼を受けたとき、一瞬ためらいました。しかし、私が現在看護婦学校の教員として関わりを持つ学生や患者さん、そして、恩師や病棟・教務のスタッフ、同級生などさまざまな人に感謝の気持ちを表わしたいと思い、お引き受けしました。それは人と人との交わりの中で、看護や助産婦業務の再認識とその素晴らしさ、看護婦教育の大事さを知ることができたからです。

助産婦から看護婦学校教員へ

私の現在の職場は、2年課程の進学コースです。その中で、私は1年生の副クラス担任と、実習は母性と、母性が実習期間にないときは内科やターミナルを中心とした混合病棟に関わり、講義は母性看護学(概論・保健・臨床看護)、基礎看護技術(排泄)、臨床看護総論(継続看護)を担当しています。

昭和51年4月、私は大阪市の市民病院の産婦人科病棟で助産婦としてスタートしました。それから4年を経て転勤、転勤後6か月たった頃看護婦学校の専任教員の話が舞い込んできました。正に晴天の霹靂で、自分のことしかできない私にとっては無理な話と、強く辞退したのですが、ついに説得され教員の道を歩むことになりました。そして、昭和56年度の大阪府主催看護教員養成講習会を受け、11月に終了後本格的に教師生活が始まりました。

今の職場は自分の出身校でもなく、オリエンテーションを聞いても教育方針や内容も理解できず、知らない人、場所、仕事も消化できないまま仕事量は増すばかり、睡眠不足との闘いでしたが、周りからはいやに元気のある人だと映っていたようです。後輩の転勤があるまでの7年間、そんな無我夢中の生活が続きました。

助産婦への心残り

新米教員も3年が過ぎると、本当に教員生活をこのまま続けなければならないのか、何年すれば臨床の助産婦に戻れるのか、やっぱり教員より助産婦のほうがいいと気持ちが揺れ、教員生活11年になった現在でも臨床で働く助産婦への夢が捨てられません。それは、生命誕生とハラハラ、ドキドキの分娩介助、妊・産・褥婦に接し、女性が母親へと変容するときに関わっていける、助産婦という仕事の虜になっているからだと思うのです。

臨床で仕事をしていた頃は、分娩介助は日々の業務でしかなかったのが、看護婦学校の教員となり実際自分の手から離れたとき、今まで以上に分娩介助の魅力が増しました。その欲求不満が、学生に母性看護を教えるときのエネルギー源になっているようにも思えます。

看護の再認識と看護教育の大事さ

助産婦も臨床を5年続けると、仕事もある程度できるようになって少し天狗になる時期です。その時期に看護婦学校に転勤し、教員養成



講習会，そして産婦人科病棟以外の実習に参加してみて，改めて自分の知らないことの多さと，看護に対する考えの甘さを痛感致しました。

私が今までに出会った看護方式は，チーム・ナースィングと一部機能別看護で，学生はプライマリ・ナースィングを実施しています。つまり，1対1の看護により看護に対する責任感と，学生とともに看護について考える時間と実践する時間が多く取れ，継続的に受け持つことで健康のレベルの変化と，それにともなって変化する患者さんや家族の反応，それらを受けとめて看護をする看護過程の基本が大事だということを，再認識させられました。

今までは短期入院の母性患者さんばかりを看護してきましたが，母性以外の科でターミナルや長期入院，再々入院し健康回復の見込みがなく心身ともに疲れきっている姿をみて，人間の根源にある生命への不安を感じさせられました。看護婦は看護の方向を間違わないよう，しっかり看護の対象を把握し患者を理解・共感できる感性が必要となります。助産婦も看護婦であることを忘れないためにも，看護婦教育の大事さを考えさせられます。

新カリキュラム教育の中で

平成2年4月から新カリがスタート，本校でも今年3月新カリ教育を受けた学生が卒業します。新カリがスタートする前は，現行の授業の見直しで会議の連続。仕事が増す一方で，教師の過密労働を何とかしてほしいと叫びたい気持

でしたが，多くのことも示唆されました。

日々の業務に追われ，全体を見て自分の立場や役割を知ることを怠っていた中で，他教科との関連，目標の設定，授業効果を上げるための工夫など初心に帰ることができました。その中で一番強く考えさせられたのは，将来伸びる学生の継続教育のあり方です。看護教育は看護婦だけで教育できるものでなく，たった2年で教育が終了できるものでもありません。

本校は，入学してくる学生の背景が多種多様です。学生が何を求めているのか，そして社会が何を求めているのか予見して教育しなければなりません。試行錯誤していますが，アンケート調査や課題に沿ってのレポート，指導時の学生との会話により学生の理解に努めています。

どの看護婦学校も母性看護実習は大変だと言われています。患者さんの健康レベルの変化の速さと，母性看護技術の多さ，助産婦が看護婦教育をするため，学生に求めるレベルが高いように思えます。幸い本校では，出棟すれば学生全員の顔が見られる日々が続いています。学生とともに，そして患者さんや病棟のスタッフからの刺激や協力があって，日々の実習ができることを喜びに看護婦教育を行なっています。

* * *

次のバトンには，助産婦学校の同級生で岐阜大学医学部附属病院産婦人科病棟で病棟婦長として，ハイリスク妊婦の多いなか精神的看護に力を入れ，毎日張りきって勤務している松宮良子さんにお願いします。